樊建川 編著

1931—1945

兵火

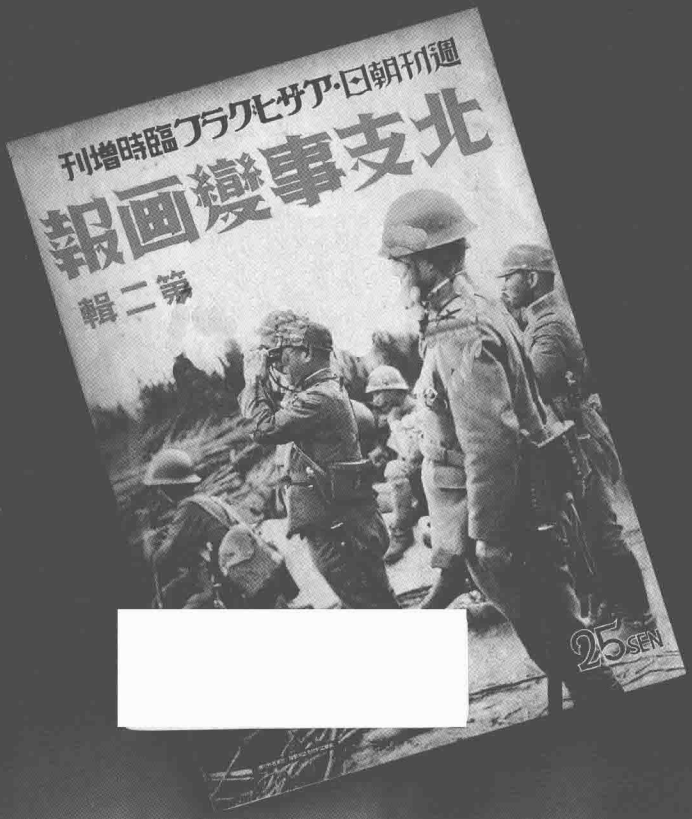
日本人従軍記者の目で見た抗日戦争

外文出版社
FOREIGN LANGUAGES PRESS

兵火 1931—1945

——日本人従軍記者の目で見た抗日戦争

樊　建川　編著



外文出版社

图书在版编目（CIP）数据

兵火：1931～1945：日文/樊建川编著. -- 北京:
外文出版社, 2014
ISBN 978-7-119-09106-8
Ⅰ.①兵… Ⅱ.①樊… Ⅲ.①日本－侵华－史料－图
集 Ⅳ.①K265.606-64
中国版本图书馆CIP数据核字(2014)第232770号

责任编辑：郭雅坤
封面设计：白雅丽
印刷监制：冯　浩

兵火 1931–1945 —— 日本战地记者眼中的抗日战争

樊建川 编著

©2014外文出版社有限责任公司

出版发行：外文出版社有限责任公司
地　　址：中国北京百万庄大街24号
邮政编码：100037
网　　址：http:// www.flp.com.cn
电子邮箱：flp@cipg.org.cn
电　　话：008610-68320579（总编室）
008610-68327750（版权部）
008610-68995852（发行部）
制　　版：北京杰瑞腾达科技发展有限公司
印　　刷：北京蓝空印刷厂
经　　销：新华书店/外文书店
开　　本：787mm × 1092mm　1/16
印　　张：17.75
字　　数：230千字
版　　次：2014年第1版第1次印刷
（日）
ISBN 978-7-119-09106-8
08800（平）

2014年初版発行
ISBN 978-7-119-09106-8
©2014 中国 北京 外文出版社有限責任公司
外文出版社有限責任公司出版
中国北京百万荘大街24号
〒100037
http://www.flp.com.cn
中国国際図書貿易総公司発行
中国北京車公荘西路35号
〒100044
北京P.O.Box399
中華人民共和国にて印刷

版权所有　侵权必究　如有印装问题本社负责调换（电话：68995960）

前書き

歴史を書くには、正面から書く方法と婉曲に書く方法がある。長い間、私たちは固定した立場、画一的な視点で歴史を回顧することに慣れてきた。見方が分かれるという理由で、正面から書ける多くの歴史の章節が人為的に省かれてきた。決して遠くない抗日戦争もその一例で、手を伸ばせばそのぬくもりが感じられるのに、それを記述する歴史資料は十分とはいえなかった。こうしたことはわれわれが過去を知り、未来を把握する上でマイナスである。

2005年、胡錦涛主席は中国人民抗日戦争および世界反ファシズム戦争勝利60周年大会で次のように述べている。

「中国国民党と中国共産党が指導した抗日の軍隊は、それぞれ正面戦場と敵後方戦場の戦闘任務を分かち合い、共同で日本の侵略者に抵抗する戦略的局面を形成した…」。

この年、さまざまな抗戦記念イベントがつぎつぎと開催され、長い間埋もれていた多くの史実が大量に掘り起こされ、忘れられそうになっていた歴史の細部が探究され、私たちの認識も歴史の本源に近づいてきた。正確で緻密な史料を記載することは、民族に対して責任を負うことであり、人びとに歴史の真実を知らせるだけでなく、さらに重要なのは後世への教育や啓発となることである。

私にとって、2005年は記憶に値する特別な年であった。な

ぜなら、「建川抗戦博物館集落」が四川省安仁鎮で一部落成したからである。当時誰もがこの民間博物館が根を下ろせないのではないかと懸念していたが、抗戦館シリーズの「中流砥柱館」(大局を支えた者たちの館)、「正面戦場館」、「川軍抗戦館」、「援華米軍館」、「不屈抗俘館」はあいついで開館した。近代の歴史をテーマとする大規模な個人の博物館村ができあがったことは、われわれの時代にも思想にも変化が生じていることを示すものである。

私は20数年間、抗戦文物の収集に没頭してきた。実り多い成果を上げ、収蔵品は百万件以上に達している。本業を終えたあとの余暇はほとんどすべて、文物の収集、整理、考証に費やしてきた。文物は大衆的で詳細な歴史である。これらに触れるたびに、私はいつも生き生きとした脈動を感じるのである。

抗戦収蔵品の中で、私の最大の誇りは多大なエネルギーと財力を投入し、さまざまなルートを経て収集した日本軍従軍記者の撮影した映像資料である。中でも「不許複製」、「不許公開」の文字が印刷される千冊以上の新聞・雑誌は、計り知れない史料的価値がある。ここに掲載する写真と文章は、わが国の領土を踏みにじり、国民を殺りくし、資源を略奪した日本の侵略者の醜い顔を生々しく伝えている。それらは日本人が自ら実録したパノラマ的な「日本軍の中国侵略の暴行備忘録」であり、日本軍が中国を侵略したことを示す最も有力な物的証拠である。日本は中国侵略の歴史をひた隠しし、機密防衛工作も厳重だったため、わが国に戦時の日本メディア作品はわずかしか伝わらなかった。

早くから私は、自分が収集した日本軍の戦地従軍記者が撮

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

影した写真や日本軍将兵が個人的に写した写真集を素材とし、『兵火1931～1945』という一冊の本にまとめたいと考えていた。だが何度もペンを手に取っては、それを置いてしまった。

これは難度が高すぎる大テーマであった。まず、カバーする期間が長きに及ぶこと。手元にある収蔵品は、まるで明解な「日本軍中国侵略スケジュール表」のようで、「九一八事変」から日本の敗戦降伏までの各時期をすべて網羅している。断片を切り取って紹介すれば、14年間の中国の抗戦史にとって、必ずどこかで全貌を見ていない、という感じを与えたであろう。しかも私の本職はビジネスであり、字句をいじくり回すのは趣味にしかすぎない。文章表現力やエネルギーが不足し、おそらくこの作品をコントロールしきれなかったであろう。

だが「七七事変」77周年が近づくにつれて、私は何とかこの本を出版したいと決意したのである。

タイトルを『兵火 1931—1945』にすることは、私にとって気の重いことであった。書名そのものがこの本の内容が重苦しいものであることを意味している。これは一つの民族がもう一つの民族の侵攻に抵抗した血と涙の歴史を記したもので、すばらしい光景も楽しい歌声もない。執筆中、十数年の時空を隔ててなお、死に直面しながら毅然と前進した中国の軍隊と人民、痛ましい境地におかれても必死にもがきつづけた同胞たちの姿が、たえず私の脳裏に浮かんでいた。感情を抑えきれずに涙があふれ、やむなくペンをおいて心を落ち着かせ、理性を取り戻すように自分に言い聞かせたことも、何度もあった。何ヵ月も歴史と現実の間を行き交ったすえに、ようやく少し心の重荷をおろすことができたのである。

この本を書く目的は、写真で歴史を説明し、日本軍従軍記者の撮影した映像を借りて、日本の右翼分子が中国侵略の歴史を否認し、勝手に改ざんすることに反論するためである。古い写真は時にテープレコーダーのように、私たちの記憶を事件発生時に引きもどし、歴史的な一瞬に立ち止まらせる。古い写真は歴史的文献であり、人の知的活動と実践活動によって生み出されたものでもある。日本軍の従軍記者がカメラで記録した「皇軍の威厳」も、正義の人たちからみれば、日本の侵略者が中国を蹂躙した残酷なプロセスに変わる。写真を通して分かるように、日本は中国での計画的な殺りくや計画的な略奪のために、当時国内にあったあらゆる先進技術を駆使していたことが分かる。れっきとした証拠を目の前にして、一部の日本人の言動はまるで自分の矛で自分の盾を突くような自家撞着を起こしている。

歳月が経つにつれて、多くの人びとや物事は塵埃に帰す結末となる。私はいまこの『兵火 1931—1945』が、あの戦争を経験した中日両国国民の記憶をよみがえらせ、「共有の記憶」の空白を埋めるための一粒の砂になれればいい、と願っている。

2012年末、戦後生まれの安倍晋三が再度首相に就任した。そして就任早々、日本国憲法の改正を「解決すべき重要課題」と位置づけ、また一方で「憲法解釈の変更」によって集団的自衛権を解禁した。これは日本国憲法の改正を実現し、再軍備を図ろうとする強烈な願望を表している。

安倍晋三政府のいわゆる「憲法改正」とは現行の日本国憲法第九条の改正をさす。日本国憲法第九条は、戦争の放棄、陸海空軍及びその他の戦力の不保持、国の交戦権の否認を明確に示し、また、日本が武力を国際紛争を解決する手段とし

て放棄すること、すなわち集団的自衛権の行使を禁じることを明確に示している。いわゆる「集団的自衛権」とは、本国と密接な関係がある他の国が武力攻撃を受けた場合に、自国が攻撃を受けたかどうかにかかわらず、武力によって関与し阻止する権利を有するということである。

「平和憲法」といわれる日本の現行憲法は第二次世界大戦時に、国際社会の無数の抗日英雄が命と鮮血と引き換えに勝ち取った成果であり、日本軍国主義に対する正義の審判と徹底的清算、国際平和秩序の維持に基づいて生み出された日本国の根本法である。

2013年12月26日、安倍晋三は首相再任一周年に当たり、日本の侵略を受けた周辺諸国や世界の世論及び正義の人々の強い非難と反対を顧みず、首相の身分で第二次世界大戦の日本人A級戦犯14人を祭った靖国神社の参拝を強行した。……これら一連の行為は人々を警戒させずにはおかなかった。日本の首相に当選した際、日本の「尊厳を取り戻す」と約束した安倍晋三は、日本をいったいどこへ連れて行こうとしているのか、と。

第二次世界大戦が終結して70年近くたったが、日本の右翼政客らは戦争中に犯した罪悪と負うべき責任をかつて反省したことがなく、ファシズムへの尊崇を終始放棄したこともなく、依然として軍国主義の復活を夢見ており、甚だしきに至っては靖国神社参拝という政治行為を日本文化であると糊塗している。彼らは第二次世界大戦時の日本を欧州殖民主義列強の被害者として描き出し、日本が発動した侵略戦争をアジアが西側の植民地に転落しないように行った正義の戦いに美化し、特に現在は、なんと14年にわたって日本に蹂躙され

ていた中国を攻撃的な敵として描き出している。

ドイツの元総理ヘルムート・シュミットはこう述べている。安倍晋三に代表される日本の戦後世代の政治家はきちんとした歴史教育を受けていない。彼らの歴史観は現実と大きな違いがある。だから靖国神社に祭られている14人のA級戦犯はアメリカ人、中国人、欧州人にとっては戦争犯罪者であるが、彼らにとっては犯罪者ではないのだ。

2014年7月7日は「盧溝橋事変」77周年記念日に当たる。午前中、首都の各界代表は北京の盧溝橋にある中国人民抗日戦争記念館に赴き、中華民族の全面抗戦勃発77周年記念式典を厳粛に挙行し、「独立自由勲章」のレリーフの除幕式を行った。習近平国家主席は重要談話を発表し、次のように指摘した。

「中国人民抗日戦争と世界反ファシズム戦争の勝利から70年近くになる今日もなお、依然として動かぬ歴史的事実を無視し、戦争で犠牲となった数千万の無辜の命を無視し、歴史の潮流に逆行し、再三にわたり侵略の歴史を否認、さらには美化し、国家間の相互信頼を破壊し、地域の緊張をもたらす者が少数おり、中国国民を含む平和を愛する全世界の人々の激しい非難を招いている」。

習主席はさらに「歴史は歴史であり、事実は事実だ。歴史と事実を変えることは誰にもできない。多大な犠牲を払った中国人民は、鮮血と命で記した歴史を断固として守る。侵略の歴史を否定、歪曲、さらには美化しようとするいかなる者も、中国人民と各国人民は断じて許さない！」と強調した。

これはかつて日本の侵略を受けた中国人民の歴史に対する冷静な認識である。

「人は圧迫を受けて、どうして戦わないことがあろうか」。私は魯迅のこの言葉が好きである。そして、次の言葉を読んで不屈の闘志が湧いてきた。「こつこつ働く中国人はわれわれの力を尽くし、とことんまで抵抗するであろう。われわれは最後の勝利まで奮闘するであろう。たとえ美しい国土や悠久な歴史が鮮血に染められても、ごうごうと燃え盛る火に燃えつきても、惜しむことはないであろう」。

これこそ、私が抗日戦争の最大の意義だと理解するものである。抗日戦争はわれわれに不屈の民族精神をよみがえらせ、民族の奮起と復興のために強健な精神力を注ぎ込んだ。その後も「抗米援朝」戦争（1950～1953年）や国境地帯で行われた何回かの自衛反撃戦など、国の主権と人民の利益を守るあらゆる戦いで、中国は一度も失敗したことはないのである。

文章の終わりにあたり、私は敬虔な気持ちで次の言葉を記したいと思う。

「天下の興亡は、国民の一人一人に責任がある」。

2014年8月

目　次

前書き　*9*

第一章　中国侵略の道をすすむ日本　*17*

親子二代の「東北の王」17
「九一八事変」前　*23*
張学良の宿命　*25*
蒋介石の「九一八」　*32*
悪魔の731部隊によるこの世の地獄　*33*
東北地区での抵抗　*37*

第二章　内陸に拡大する戦火　*43*

「一二八」淞滬抗戦　*43*
「大刀で、日本鬼子の頭をはねる」　*49*

第三章　全面抗戦始まる　*55*

全面抗戦の第一弾、盧溝橋　*55*
戦火は再び上海に燃え広がる　*65*
平型関の大勝利と忻口会戦　*81*

南京防衛戦　*87*
人類史上最大の虐殺——南京大虐殺　*95*
戦闘精神の決戦、徐州会戦と台児荘戦役　*104*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

花園口堤防の決壊　*114*
武漢会戦における抗戦精神　*119*
14年間の全国大移動　*126*
水を血に染めた海軍の防衛戦　*139*

第四章　最大の危機に直面する中華民族　*147*

大地の悲壮な歌――南昌会戦　*147*
「焦土抗戦」の長沙会戦　*152*
激戦の崑崙関戦役　*160*

抗日戦争の古参兵を探す　*165*
「敵の後方に行く」　*168*
民族のガン細胞――売国奴　*173*

文化界の抗戦　*178*
血みどろの戦場と化した四川省　*182*
空襲大虐殺をこうむった不屈の重慶　*190*
永遠の竜の後継者―華僑　*198*
空中激戦した英雄たち　*202*
道を得るものは助け多し　*208*

第五章　太平洋戦争の勃発と中国戦線の成立　*217*

アメリカ参戦　*217*
中国の孤軍奮戦に終止符　*221*
「東方のスターリングラード防衛戦」―常徳会戦　*229*

鉄軍の遠征　*234*
衛立煌司令官の勝利発言、「今日は東京での合流の始まりだ」　*238*

第六章　日本侵略者への最後の一撃 ***247***

日本のあがき　*247*
日本の活路は降伏あるのみ　*255*

第七章　日本の降伏 ***267***

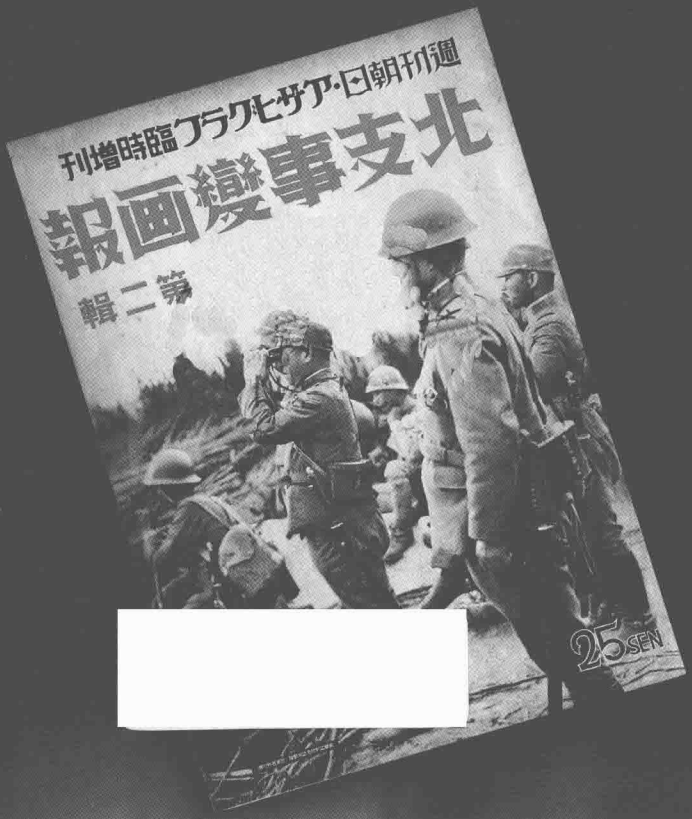
後書き ***280***

付録　中国の主要な抗日戦争に関する博物館 ***282***

兵火 1931—1945

——日本人従軍記者の目で見た抗日戦争

樊　建川　編著



外文出版社

日本国内で出版された戦時グラビア誌

アサヒグラフ
ASAHIGRAPH
週刊朝日
北支事變畫報
第一輯
刊增時臨アサヒグラフ
北支事變畫報
第二輯
アサヒグラフ
ASAHIGRAPH
擊進の後略攻江九
北支事變畫報
第二輯
20+
行發日五十月八
上海事變寫眞
全輯
國際寫眞
精
國際寫眞
南京
記念畫報
那支新黎明篇
歷史寫眞
昭和拾參年
四月號
大日本支那事變畫報
第五輯
東京國際情報社發行

「九一八事変」から日本が無条件降伏するまでの14年間に、中国の900余りの都市が占領され、数十省が踏みにじられた。日本軍は行くさきざきで虐殺し、家を焼き、略奪し、悪事の限りを尽くした。

国土は奪われ、国民は塗炭の苦しみをなめ、あえいでいた…。中華民族はこの世界で最も野蛮な軍隊に対して、やむなく「最後の叫びをあげた」。

この14年間、国のために命をささげた烈士の碑を広大な国土の各地に立て、3500万人の生命をもって中華民族を目ざめさせよう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com